TOKAI WAKASHACHI

わかしゃち

第2号　1997・12
土佐中・高同窓会・東海支部会報
編集人／35回生　内田順子
〒460-0024　名古屋市中区正木3丁目13－13　コスモホーム　気付
TEL　052－332－3370
FAX　052－332－3372

第二の人生

前支部長　二十二回生
水谷　昭

「定年退職して暇になったろう。毎日何をして暮らしよるぞね？」

足かけ二十五年勤めた愛知県心身障害者コロニー（以下コロニーと略）を平成六年に退職してから、よく訊ねられる質問である。退職の前には私自身も増えるはずの余暇をいかに過ごすか気になりつつも、忙しさに紛れてゆっくりと考えることもなかった。

ところが、退職が半年後に迫った頃、以前コロニーに在職していた看護学校の校長さんから、

「先生暇になるでしょう。助けてください！」

と突然の電話である。

〈窮鳥懐に入れば猟師も殺さず〉の諺もあり、ましてや相手がご婦人とあれば嫌とは言えない悪い癖が出て、結局、四月から翌年の二月まで延々と続く解剖学の講義を引き受ける羽目に陥った。

その後、ご縁があって、客員教授としての日本福祉大学をはじめ、専門学校や、看護学校、女子短大等合計六か所に通うこととなった。

「暇どころか、日替わりメニューの講義の出前で忙しい毎日よ」

というのが、冒頭の質問に対する答えとなっている。

私の専門は基礎医学の病理学である。したがって、確かに医師免許証は持っていても臨床経験には乏しく、車の運転に例えればペーパードライバーのような者だと自覚している。だから、その後も、老人施設の勤務医や施設長等へのお誘いは辞退してきた。

ところで、看護学生に解剖学や病理学の知識が必要なことは誰でも納得できるが、女子短大や福祉を旗印にするいわば文科系の大学で、私のような者に出番があることに首を傾げる人もいた。

しかし、女子短大でも栄養士のコースでは解剖生理学の単位が必修であり、また、近年、社会福祉士とか作業療法士といった国家試験による資格が増えてきたが、それらの受験資格に『医学概論』とか『医学一般』といった科目が必修であり、国家試験科目にも含まれている。現役の医師たちはこうした学校の教育には関心が薄く、またその余裕もないところから、私にも声がかけられたのである。私が医師であるだけでなく、コロニーという福祉施設に長年勤務し、その長も勤めたという経歴が買われて、大学も迎えてくれたことと思っている。

こうして始まったわが第二の人生も四年目の半ばを越した。看護学校には現役のときから関わっていたので、担当時間が増えただけの感じであったが、その他の学校では戸惑うことも多かった。

最初、あの異様な風体をした背の高い若者たちの群に入ると、まるで異次元の世界に踏み込んだような思いがしていたが、一か月もすればすっかり慣れた。そしてお互いに打ち解けて話をするようになれば、いつの時代の若者もそんなに変わりのないことに気が付いた。

若者たちと接する中で、私はただ単なる知識の切り売りや国家試験の受験講座に陥りたくない、将来彼らがいずれの分野に進むにしても、医学の接点に立ったときのハードルが、少しでも低く感じるようになって欲しいとの願いを込めて、話を進めている。

私が医学生のとき、神経解剖学の講義を受けた我が尊敬する師の一人平沢興先生が酒を飲んで赤い顔をしては、「私は若者と話をするのが大好きです」と繰り返されたことを思い出す。残念ながら私は酒は飲めないが、平沢先生のこの気持ちには同感である。

特に明るく前向きの若い女性と語りあうことは楽しい。若者たちの前途に幸あれ。

（日本福祉大学客員教授）

ゆかり探訪

三十五回生　内田順子

個展　モノ原からの手紙

堀　慎吉さん（三十回生・山梨在住）の個展が、名古屋・新瑞橋のギャラリー・ナイトウにて九月十三日から十月十二日まで開かれた。

その初日におじゃまし、話を伺った。

〈土をこね、焼いて、形を創りだす作業を重ねた焼き物を、「芸術」でも「反芸術」でもない「はじまりの芸術」としてとらえ、着地させようとしている〉とパンフレットに中沢新一氏が書いている。タイトルの〈モノ原〉とは窯の中で割れたり形が崩れたりして失敗した陶器の瓦礫の捨て場とのこと。

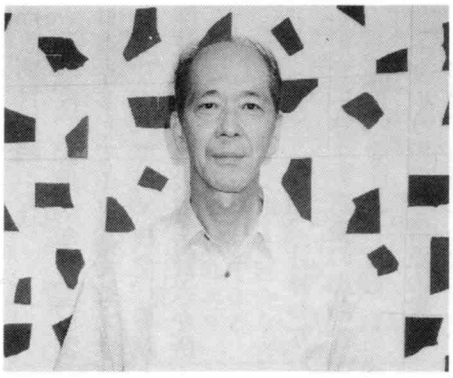
山梨県の赤い土は、土器用の土として安定しており、縄文のいにしえから、土器がつくられていたという。

堀さんの作品は、土の〈たより〉を取り出し、焼いて割って、配置して、再生の祈りを表現するのだという。

堀さんは、土とひびきあってひとつの言葉をつむぎだしている、静かな情熱家だと感じた。

山梨県には、道祖神の原点のような、まん丸な自然石が神さまとして、いたるところに祀られているのだという。

土佐に生まれて、土佐の自然に育まれ、やがて丸石神に出会う堀さんの軌跡は、遠いみちのりだったかもしれないが、作品に接するわたしたちに、時間空間を越えて、美しいもの尊いものに、気づく力を与えてくれる。



同窓会あちこち

本部だより

幹事長　三十四回生　岡内紀雄

平成九年八月二日（土）午後三時より、高知新阪急ホテルにおいて、七十二回生を含む多数の出席を得て、総会・記念講演ならびに懇親会が盛大に開催されました。

総会では役員の改選が行われ、予め町田守正会長（十六回）から委嘱を受けた役員選考委員会での選考結果が、濱田義文委員長（二十二回）から発表され、異義はなく、原案どおり選任されました。新役員は次のかたがたです。

（敬称略）

会長　岡村　甫（32）
副会長　山崎　和孝（26）
副会長　浅井　伴泰（30）
副会長　大久保浩二（32）
副会長　森木　房恵（39）
副会長　川崎　康正（42）
幹事長　岡内　紀雄（34）
副幹事長　永野　和宏（34）
副幹事長　横田　整二（40）
副幹事長　西山　彰一（48）
会計　千頭　裕（58）
会計監査　森木　将雄（32）
会計監査　田中　章夫（40）

このように、会長をはじめ役員の若返りが図られたことから、同窓会活動の更なる活性化に、期待が寄せられています。

記念講演は、二十四回生で精神医学の第一人者である大原健士郎氏（浜松医大名誉教授）による『今日を生きる・森田正馬の世界』という演題で、日本精神医学の草分け的存在である森田正馬（まさたけ）氏（香美郡野市町出身）の孫弟子として《森田療法》を受け継ぎ、〈限られた人生に不安や悩みはつきもの。打開していくには、それをそのまま受け入れ、目的をもった行動をとることが大切だ。これが森田療法でいう《あるがまま》である〉と述べられました。一味違った人生訓を含んだご講話に、感銘を受けました。

懇親会は、松浦前校長、森田現校長をはじめ中沢先生、高崎先生他多数の先生方も出席され、ソフトテニス部OB会の心のこもった司会進行のもと、和気あいあいのうちに新旧同袍盃を交わし、応援歌を合唱してお開き。

なお、来年の総会は八月八日（土）に開催いたします。東海支部からも多数のご参加をお待ちしています。

関西支部だより

事務局　二十八回生　竹原　暢子

暑さ寒さも彼岸までとはよく言ったものです。ここ関西支部事務局のある、大阪のメインロード御堂筋の、イチョウ並木にも、ようやく秋の到来です。

今年は台風もこともなく過ぎ、〈ぎんなん〉が鈴なりになっています。

さて、平成九年度後半の関西支部だよりをお送りいたします。

一、七月初旬『なんぷう』第十八号を会員約千四百名と、本部・支部・学校に配布。その後六十通ほど宛先不明で戻り（その後再送あり）いつもながら若い世代の異動の多さに驚いています。住所変更の届けのある方は少なく、なんとか探しだして再送はしますが、結局千四百名を切りました。

二、八月二日に開かれた本部総会に元支部長北村先輩（十八回生）と事務局竹原出席。本部および関西・東海・広島・香川の各支部からの出席者と交流会を持ちました。

三、九月十八日（木）に事務局にて幹事会。

①平成十年度新年パーティの日時会場を次のように決定。平成十年一月三十一日（土）ホテルグランヴィア大阪

②関西支部会則原案を作成。

四、シニアクラブ十三回生葛目先輩を中心に囲碁の会を月一回事務局のサロンで開催。

関東支部だより

事務局　四十一回生
鶴和　千秋

東海支部の皆様、『わかしゃち』第二号発行へとますますのご発展、心よりお慶び申しあげます。最近だれ気味の関東支部事務局は、すっかりあおられている感じです。もっとも、だれているのは事務局だけで、関東支部三千名は故郷を遠く離れても、依然、《意気高し》であります。

さて、去る九月二十日、定例の学年幹事会が開催されました。今年は役員改選期に当たり、支部長以下現役員はみな更迭を期待して参集いたしましたが、〈まあ、あと二年ばあ頑張ってやれや〉という声で、あっけなく全員留任となりました。見飽きた名前で恐縮ですが、恒例ですので、次に提示いたします。

支部長　宮地　貫一（21）
幹事長　溝淵　真清（32）
副幹事長　佐々木泰子（33）
副幹事長　窪田　秀忠（38）
副幹事長　岩村　康生（41）
副幹事長　二宮　潔（49）
副幹事長　市川　直介（53）
会計　吉井　雄二（49）
監事　山本　高敬（25）
監事　吉野　保徳（31）
事務局　鶴和　千秋（41）

またこの幹事会では、関東支部名簿の改訂版を来年発行することが決議されました。現行の支部名簿は、名簿それ自体の宿命とはいえ、すでに約四割の内容が役立たずとなっており、来年の郵便番号変更をも付け加え、平成十年発行をメドに準備作業に着手いたしました。完成の暁には東海支部の皆様にもご活用いただけるよう、担当幹事一同仕事そっちのけで、ねじり鉢巻きしております。

本紙が発行される初冬の頃関東では、女性ばかりの《はちきん会》が予定されたり、三十一回、三十八回、四十一回対抗のソフトボール大会が企画されたり、木枯らしにも負けない〈土佐パワー〉が吹き荒れている（あくまでも）予定です。

広島支部だより

事務局　三十七回生
小島　康

暑く長い夏が終わり、ようやく秋を迎えました。第十四回全国都市緑化フェア開催中です。宮島は元就ブームが追い風となり観光客大幅増し。明るいニュースの広島から支部の活動報告をいたします。

四月、支部会報『青春』八号を発刊。五月の関東支部・東海支部総会、八月の本部総会に出席。

九月六日〈夏の集い〉を開催。あいにく終日雨でしたが観光バスで防府の史跡巡りをしました。広島組にいつも合わせていただいている山口組のことを考慮して、初めて広島を離れての会合です。最初の目的地、月の桂の庭には桂浜の五色石と大歩危・小歩危の石が庭石の中に配置されていて、土佐っ子は感動するやら嬉しいやら……。毛利邸の広大なお屋敷と庭園では、ゆったりと大らかな気分に浸って、時の流れを感じました。阿弥陀寺・天満宮・国分寺もそれぞれの趣がありました。

お仕事多忙にて今回は欠席されました広島支部名誉会員の竹村照雄先輩（二十回生）に〈夏の集い〉の事後報告をいたしましたら、次のようなご返書をいただきました。

〈ダイアナ妃のような生き方マザーテレサのような生きざま、元就の時代の人々の人生今の我々とて歴史の一コマの中の存在です。たとえ全く無名でも、その一生は掛け替えのないもの。小さくても自分の役割に徹し、それを集積して大衆のエネルギーにしたいものです〉

然り。腐敗混迷した世相の渦の中にあって、一人一人が胸に留めて、反省即実行しなければならない心の持ち方を説いたお言葉だと思います。

平成十年一月二十四日の広島支部総会は、十周年の節目を迎えます。そろそろ準備に取り掛からねばなりません。

学校だより

学校長　森田幸雄

去る五月の、東海支部会報『わかしゃち』創刊に引き続き、早くも第二号刊行の計画を承り、心からお喜び申しあげるとともに、会員諸兄姉のヴァイタリティと実行力に改めて敬意を表する次第です。

私としては五月末の貴支部総会に初めて出席させていただき、直接団欒の機会に恵まれたことは嬉しいかぎりでした。さらに八月の本部総会で松崎支部長さん・南事務局長さんと再びお会いでき、東海支部とのご縁の深さを改めて感じました。今後ともよろしくご交誼のほどお願い申しあげます。

さて、学校も第二学期に入り概ね順調な滑り出しを見せております。全学期通じて最大の学校行事である中高合同運動会も、九月二十四日無事終了することができました。

尤も集中豪雨により一日順延というハプニングが生じ、幾分の戸惑いはありましたが、当日は類い稀な秋空のもと全校生徒千六百七十名が一体となって、伝統のさわやか運動会を展開、日頃の学習成果の一端を、保護者同窓生の皆さん、さらには広く市民県民のかたがたに披露できたことはこの上ない喜びでした。特に今回は正副両実行委員長が共に高三女子生徒で占められ、また紫組応援団長も女子生徒と、まさにハチキンパワー全開の様相と相成り頼もしい気分でした。

次に十月第五週には中学校最大の集団学習活動である九州縦断の修学旅行が予定されており、現在中三挙げて準備に大わらわといったところであります。事故なく絶対安全を主眼として楽しく実り多い集団活動目指して全力を尽くしたいと思います。

さていよいよ勉学を含め文化・芸術・スポーツ等の面で深化発展の期待のかかる好季の到来です。学校としては中高とも夏休みや運動会気分を一斉に切り換え、学習活動に集中専念する雰囲気づくりに努め、究極は県下一の進学校としての面目保持に挙校態勢で取り組む決意ですので、なにとぞご声援ご激励のほどお願い申しあげます。

最後に、重ねて『わかしゃち』第二号の発刊を御祝い申しあげ、合わせて東海支部の更なるご発展を希って、学事報告とさせていただきます。

香川支部だより

幹事長　四十回生　武山正人

香川支部は、やっと二年目を迎えた新しい支部です。

当支部は、実は昭和六十二年に、現関西支部長の永野元玄氏を中心に一度旗揚げされましたが、主要メンバーの異動により活動が中断した状態となりました。昨年春、これを憂えた本部の大久保浩二副幹事長、坂本大幹事が高松を訪れ、同じ三十二回生の四国電力乾正靖取締役（当時）と現支部長の香川大学の土田哲也教授等に声を掛けて、七月に再発足いたしました。会員は約二百名、役員七名。

ところが、第二回の総会の準備に取り掛かった今年七月宮地正隆幹事長（36回生）と西森三良会計監査（48回生）が突然高知へ転勤。サラリーマンを主要メンバーとしている弱点が、またも露呈しました。後任となったのが、不肖私と、小野明彦氏（46回生）です。

七月二十三日の総会には、松尾教頭先生や本部役員にお越しいただき、高松の《土佐っ子》において、総勢三十名が皿鉢料理を囲み、楽しいひとときを過ごしました。今年は、ビンゴゲームによる高知の名産プレゼントを取り入れお開きの『向陽の空』の大合唱まで、盛り上がりました。香川支部は、小さな所帯で親密になりやすい点を活かし息長く地道に活動していく所存です。

われらわかしゃち

名古屋サラリーマン奮戦記

三十一回生　大高坂　秀雄

この地に来たのは、昭和三十七年四月。名古屋に隣接する春日井市の、株式会社愛知電機工作所という、地場の町工場に務めることとなった。

入社の翌年、おりからの不況で、先輩社員たち二百名と子会社へ転籍させられた。入社してすぐ、労働組合に加入するしないで、新入社員六十余名を扇動したのがいけなかったのかもしれない。

入社十年目、本社に帰り、就いた仕事が労働組合の専従書記長。

昭和四十九～五十年のオイルショック。このとき、組合員千三百名の先頭に立って、華々しく闘ったと書けば格好いいのだが、その実、一戦も交えることなく、《一人のクビも切らぬ》ことを条件に、《賃上げは世間相場の半分、ボーナスは一か月》で早々とシッポを巻いてしまった。

これで組合書記長はクビ。会社に帰るわけにもいかず、組合の上部団体（同盟）に拾われて出向。いま思うと、この時期は結構楽しかった。

春日一幸率いる愛知民社の全盛期であった。

〈当選は歩いてこない、だから歩いて行くんだよ。一日一票、三日で三票……〉

村会議員から国会議員の選挙まで、毎日選挙だった。

昭和五十五年会社に帰り、総務に居る。

私の勤めている会社は、今の相談役（八十七歳）が昭和十七年に創立し、平成三年まで社長をしていた。昭和五十七年、社長は現職の身ながら勲三等瑞宝章を受賞した。この地方ではちょっとした名士である。

商工会議所の会頭、国際親善協会、地元代議士、地元大学の後援会、市役所、警察、消防関係等々の会長など、数えきれないほどの《お役》を引き受けていた。その手伝いやら連絡係がわたしの仕事であった。おかげでこの地の多くの先生方のご指導を得た。

さて、名古屋はいま、《二〇〇五年国際万国博覧会》に向けて、久しぶりに燃えている。中部新国際空港、第二東名高速道路、リニアモーターカーなど大型プロジェクトが動きはじめた。

お世話になったこの地に少しはお返しのできるチャンスかもしれない。

こんなことで、ご先祖様には誠にすまんことだが、故郷土佐に帰るのは、また少し先になりそうである。

（愛知電機株式会社取締役）

平成九年支部総会その日私は

四十一回生　村山文世

平成九年の東海支部総会は森田校長の出席を仰ぎ、五月三十一日に、盛大に行なわれたことと思いました。

実は私はその日、二回目のゴルフコースということで、喜び勇んで、北海道ゴルフ倶楽部・苫小牧コースに出かけていたのです。

私が住んでいる愛知県岡崎市には、世界的な《岡崎国立共同研究機構》（分子・基礎生物・生理学の三研究所）があります。長年の飲み友達の菅野先生（北大と生理研の兼任教授）が会長を務める国際学会が、札幌で開催されたので、飲み友達と表敬訪問をして、その後ゴルフ場へと行ったわけです。

もちろん、松崎支部長や南事務局長、はたまた会社や女房子供には〈学会出席〉というもっともらしい理由だけし

か言いませんでしたが。

朝八時。ゴルフ場に着くとパトカーや消防車がやたら多く目につきます。

準備をして十番ティーへ行くと、鉄砲を持った人やパトカーがフェアウェイをウロウロしています。キャディーの話から、我々はやっと〈クマが出た〉ことを知りました。

クマが消えたというので、二時間遅れで、イン・スタート。四ホールめの十三番。同僚がナイスショット。しかし左に少しそれてブッシュへ。鼻歌混じりで私は同僚のボール探しに協力していました。そのとき同僚の「ヒエー」と悲痛な声。「なんぜよ」と寄っていくと、軟らかく、まさしくクマのウンチとおぼしきものに足を突っ込んでいました。一同危険を察知し、取り敢えず電動カートに乗ってフェアウェイをUターン。

われわれの真っ青な顔を見て、後続の人も、カルガモの親子のように、続々と後についてUターン。クラブハウスに逃げ帰りました。

札幌行きの列車に乗って、そこでやっと生き返った気持ちになりました。

翌日の『中日新聞』には、〈六歳くらいの雄のヒグマ。体長二メートル、体重百五十キロのもの射殺〉と報道されていました。

これが今年の私の支部総会でした。つぎは真面目に出席します。

（萬有製薬株式会社勤務）

小牧自慢

五十五回生　上田　容子

愛知県小牧市に移り住んでもう二年。話す言葉に名古屋弁が出てきたりして、この土地に馴染んできたことを実感しています。主人も高知出身なので、家の中ではバリバリの土佐弁なのですが、ちょっと間延びしたような名古屋弁がポロッと自分の口から出てきた瞬間、でらびっくりしてしまいます。

小牧市は名古屋市内と違って、とても田舎です。なんとなく高知らしくて落ち着きます。高知県で言えば、南国市でしょうか。空港があり、田園風景があり、小さいながらお城もあります。さすが戦国武将の出身地、尾張です。

小牧山にある小牧城は、織田信長が美濃攻略の拠点として築いた城。《小牧・長久手の戦い》では、徳川家康が本陣を敷いた所です。また、隣の犬山市には、織田信康が築城した犬山城があります。

その犬山城から見下ろした風景、見渡すかぎり広がる大地濃尾平野には驚きました。高知城からの景色とはスケールが違います。土佐っ子が、太平洋の黒潮に揉まれて育ったように、名古屋の人々は、広大な濃尾平野に培われて育ってきたのだと思います。

十月十八、十九日には《小牧市民祭》が催されます。駅前の広場を中心に、フリーマーケット、ミニ四駆大会など大人も子どもも楽しめるお祭りで町が賑わいます。この秋は名古屋でも種々なイベントが開催されています。祭り好きの私は、心を踊らせています。

でも、なにかもの足りない気がします。やっぱり故郷の祭りが一番！　私の中の土佐っ子気質は、まだまだ健在です。

（専業主婦）

伝言板

お便り募集！

次号の『わかしゃち』に掲載します。たとえば、

同窓生の消息
求人求職
花嫁花婿募集
美味推薦
文化活動案内
ホームページ
趣味
ボランティア
得々情報

など、土佐高同窓会東海支部活性化につながるものを、どしどしお寄せください。

名古屋半年生の雑感

五十一回生　武政龍司

この四月の人事異動で名古屋へやって来ました。職場は高知県名古屋事務所。これまでは高知県大阪事務所名古屋商工出張所だったのが、高知県と中部圏との交流を強化するために、新たに独立設置されたものです。

事務所の仕事は要は高知県のセールスマン。企業誘致、観光、物産などあらゆることで高知県をPRし、人・物・情報などの交流を活発にして県勢発展につなげることを目指しています。

こちらと高知との交流の最近の例を紹介しましょう。この春に事務所が立ち上がって以降、事務所に名古屋学生グループ『鯱』のメンバーがよく顔を出してくれます。

『鯱』は、名古屋近辺の約十五の大学の学生等が構成する踊り子グループで、北海道で開催されているYOSAKOIソーラン祭りに、昨年から参加しています。

YOSAKOIソーラン祭りは、高知のよさこい祭りをベースにしてソーラン祭りを合体させてできた新しい祭りで、今や夏の北海道に欠かせない大きなイベントに成長しています。

『鯱』のメンバーは、本場高知へも踊りに行くと同時にこのような祭りを名古屋でも創出したいと願い、地元で活動を始めたのです。

名古屋事務所としても、名古屋に新しい踊り文化が生まれ、高知と、こちらの若者との交流が始まることを期待して、彼らの活動を応援しています。

さて、名古屋へ来て早半年が過ぎました。これまで、名古屋といえば〈金のしゃちほこ〉と〈きしめん〉ぐらいしか知らなかった私。

方角一つにしても、高知市のように山がある方が北といった目安を見つけられないので、東西南北が判らず右往左往の日々です。

見知らぬ土地でありがたいのは人のつながりであり、この土佐中・高等学校同窓会東海支部や名古屋高知県人会の存在は心強い限りです。名古屋弁もいいけど、やっぱり土佐弁を聞くとホッとするなあというのが実感です。

ともあれ、手探りの毎日を送ってきましたが、ようやく生活も落ち着いてきました。せっかく名古屋に来たのだから、貴重なチャンスを生かして、赤味噌に親しみ、名古屋限定ビールを愛飲し、ドラキチとなりながら、高知と違った都会の生活を満喫したいと思っています。

同窓会の皆様には高知県発展のためのいろいろな情報、アドバイスなどをいただければ幸いです。

事務所は栄の中日ビル四階にあります。狭い所ですが、気軽にお立ち寄りください。

（高知県名古屋事務所勤務）

編集後記　なごや・ん？

『わかしゃち』の編集後記のタイトルを、ちょびっと解説しちょきます。《ん》は五十音の終わりの字。そこで尾張と掛けたのです。尾張名古屋発の『わかしゃち』終わりではなく、これからも続きますのでどうぞよろしく。あ、東海支部のエリアは名古屋だけではありません。愛知・岐阜・三重・静岡もっとかな？

同窓の方々の連絡をおまちしています。

（内田　順子）